

## 令和2年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

「高い志」を持ち、既存の枠を超える、新たな価値を生み出す真のリーダーを輩出する学校。

- 基礎・基本の充実と深い学びを通じて未来を拓く力を養い、「高い志」を持って世界に貢献できる有為な人物を育成する。
- ハイレベルな授業を通じて、進路実現を可能にする高い学力とのびやかな知性を育む。
- 生徒の自主性を重んじ、互いの協力や切磋琢磨を通じてたくましい人間力を育成する。

## 2 中期的目標

- グローバルリーダーズハイスクールとして、3つの教育目標を深化させる取組みとともに教員の授業力向上のための取組みを実践する。

## 1 「高い志」の涵養

- (1) 「高い志」を涵養するための取組みを継続発展させる。

ア 課題研究等を通じて主体的に学ぶ意欲と姿勢を育み、大学での学びにつなげる。

イ 卒業生人材ネットワークを拡大し、大学等と連携する等、卒業生による支援体制を強化する。

- ① 大学教授、企業等で活躍する卒業生等による「卒業生講座」「学問発見講座」。
- ② 京都大学を中心とした「卒業生研究室訪問」。
- ③ 関東方面への大学等見学会「東京スタディツアー」。
- ④ 第1学年対象の「スプリングセミナー」。
- ⑤ 第2学年対象の「オータムセミナー」。

※スーパーグローバル大学及びグローバルサイエンスキャンパスへの進学者数合計150名以上を維持する。

(平成29年度(平成30年度入試)124名、平成30年度(平成31年度入試)157名、令和元年度(令和2年度入試)151名)

※高等学校卒業時の進路選択について納得している生徒の割合90%以上を維持する。(平成29年度91%、平成30年度91%、令和元年度90%)

## 2 「枠を超える知性」を備えた真のリーダーの育成

- (1) 部活動を通じてリーダーとしての資質を高める。

ア リーダー育成研修を継続させる。

イ 理学療法士による部活動サポート事業を継続発展させる。

- (2) グローバルに視点を置いた取組みを継続発展させる。

ア 海外宿泊野外行事及びその事前・事後学習、またその他さまざまな国際交流行事について、生徒自らが主体的に企画・運営することを通じて、多様性受容力を鍛え、コミュニケーション能力を高める。

イ 英語教育の内容をよりいっそう充実させる。

※海外宿泊野外行事終了後の生徒アンケートにおける満足度90%以上(平成29年度91%、平成30年度97%、令和元年度99%)

## 3 「自主自律の精神」の育成

- (1) 生徒会活動、部活動、学校行事を中心に、違いを認め共に生きる力、協調性、豊かな感性を育む。

- (2) 地域と連携した活動を通じて、地域とつながるこころを育む。

※地域と連携した活動等への参加回数生徒一人当たり平均年間1.0回以上となるようにする。

(平成29年度生徒一人当たり平均年間0.8回、平成30年度生徒一人当たり平均年間0.8回、令和元年度生徒一人当たり年間1.0回)

- (3) 自主的な読書活動の支援を通して自学自習の精神を育成する。

※1,2年生の一年間の読書量一人当たり平均10冊以上を維持する。

(平成29年度一人当たり平均11冊、平成30年度一人当たり平均13冊、令和元年度一人当たり平均15冊)

## 4 教員の授業力向上

- (1) 研究授業の実施・相互授業見学の充実・大学等との連携の深化

※授業観察の際の生徒アンケートにおける授業信頼度平均88%以上を維持する。

(平成29年度平均88%、平成30年度平均88%、令和元年度平均89%)

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和3年1月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p><b>【生徒版】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「学校に行くのが楽しい」90%、「学校生活についての先生の指導には納得できる」93%、「将来の進路や生き方について考える機会がある」96%、「先生は、いじめについて私たちが困っていることがあれば真剣に対応してくれる」97%、「担任の先生以外にも、気軽に相談できる先生がいる」75%と、それぞれの設問に対する肯定的回答が高い数値を示しており、生徒たちが教員との信頼関係を築きながら、充実した学校生活を送っていることがうかがえる。今後も引き続き、生徒の「高い志」を涵養するための取組みや、教育相談体制も含む生徒指導を充実させていくことが大切である。</li> </ul> <p><b>【保護者版】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、さまざまな取組みが中止や内容の変更を余儀なくされ、保護者にとっては回答が困難である中、多数ご回答いただけたことはありがたいことであった。</li> <li>・ 本校のさまざまな取組みについて、肯定的回答は、高大連携に関する設問では99%、その他の設問についても高い数値であり、保護者に高い割合で支持されていることがうかがえる。今後もさらにそれぞれの取組みを充実させていくことが必要である。</li> <li>・ 「生徒は、授業がためになると言っている」という設問に対する肯定的回答は92%(昨年度89%、一昨年度84%)であった。引き続き、生徒保護者の授業への信頼度を高めるため、教員の授業力向上のための取組みの内容をより深めていくことが必要である。</li> </ul>	<p>第1回(令和2年6月27日(土) メール及び書面にて実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新型コロナウイルス感染症への対応で、さまざまな取組みが、中止または変更せざるを得なくなるが、今だからこそ可能になる活動がたくさんある、というプラス思考で進んでほしい。</li> <li>・ 授業だけでなく、高大連携事業、海外との交流等についても、オンラインでの取組みを充実させてほしい。</li> </ul> <p>第2回(令和2年10月10日(土))</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「自主的な読書活動の支援」の生徒一人当たりの一年間の読書量の目標をもう少し高くしたほうがよいのではないかと。</li> <li>・ 依然として、新型コロナウイルスへの感染が収まらない状況ではあるが、こんな状況だからと自粛するばかりでなく、できることを積極的に実施して行ってほしい。</li> </ul> <p>第3回(令和3年2月13日(土))</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 新型コロナウイルス感染症の状況によって、さまざまな交流がオンラインで実施されることが多くなった。国際交流については、むしろオンラインで実施する方が交流の幅が広がると考えられるので、積極的に取り入れてほしい。</li> </ul>

## 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 「高い志」の涵養	(1) 「高い志」を涵養するための取組み ア 課題研究の充実 イ 卒業生との連携の強化による取組みの充実	(1) ア 大学の先生等の協力を得ることによって、2年生全員を対象として実施する課題研究の質を高める。 イ 本校卒業生の人材ネットワークを広げ、学問及び社会に対する興味・関心を高める取組みを充実させる。  ・卒業生講座及び学問発見講座を継続させる。また、「スプリングセミナー」「オータムセミナー」等も含めて、卒業生によるキャリア教育に資する講演会や講座を実施する。  ・京都大学を中心に卒業生の研究室訪問を継続する。  ・関東方面への大学等見学会を継続させる。その際の卒業生との連携を強化し、より広い視野で進路を考える場とする。	(1) ア・大学の先生等に課題研究や課題研究につながる授業に協力していただく回数(のべ20回以上(令和元年度30回)) イ・キャリア教育に資する卒業生の講演会や講座の数8以上(令和元年度卒業生の講演会2回卒業生講座は暴風警報発令のため中止) ・卒業生の研究室訪問8か所以上(令和元年度10か所) ・関東方面への大学等見学会の参加生徒20名程度、支援する卒業生20名以上(令和元年度参加生徒16名、支援する卒業生30名) ・各取組みに対する生徒の満足度90%以上(令和元年度学問発見講座93%、卒業生の研究室訪問99%、関東方面への大学等見学会97%)	(1) ア・京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター(CAPE)、九州大学大学院教授、龍谷大学教授、立命館大学教授等のご理解を得て、課題研究や課題研究につながる授業にのべ58回協力していただいている(◎) イ・学問発見講座は一斉臨時休業の影響で中止。卒業生講座は、例年より講座数を大幅に増やし22講座で実施した。また、それ以外に社会で活躍する卒業生の講演会を2回実施した(○)。 ・京都大学を中心とした卒業生の研究室訪問及び関東方面への大学見学会は社会状況に鑑み中止(一)。 ・卒業生講座に対する生徒満足度は97%(○)
2 「枠を超える知性」を備えた真のリーダーの育成	(1) リーダー育成プログラムの充実 ア リーダー育成プログラムⅠの充実 イ リーダー育成プログラムⅢの充実  (2) 「グローバル」に視点を置いた取組み ア 生徒主体の宿泊野外行事及び種々の国際交流行事の取組み イ 英語教育の充実	(1) ア 各部・同好会等の部長等に対して、リーダーとしての資質を高めていくプログラムを充実させる。リーダー論やコーチングの手法、人間関係トレーニング等についての講演等を実施する。 イ 部活動に参加する部員を対象に、理学療法士による指導・支援を定期的実施し、健康を自己管理する能力を高めるとともに、高い志を持ち、諸活動において良い結果を出せるよう取り組む。  (2) ア・第2学年の宿泊野外行事については、学校交流や現地の歴史・文化の理解を深めるための事前・事後学習等も含めて、生徒が主体的に取り組む。 ・長期留学生の受入れ、海外からの研修旅行生との交流、第1学年全員を対象とした大阪大学等の留学生との交流についても、生徒が主体となって異文化理解や他国理解を深める。 イ・英語イマージョンプログラムを実施し、英語運用能力を高め、宿泊野外行事の充実につなげる。 ・英語の授業を通じて、英語でのプレゼンテーションやディベートのスキルを向上させる。	(1) ア・リーダー育成プログラムⅠの実施回数10回以上(令和元年度12回) ・参加生徒のアンケートにおける満足度80%以上(令和元年度97%) イ・リーダー育成プログラムⅢの実施回数10回以上(令和元年度11回) ・参加生徒数のべ850名以上(令和元年度830名) ・支援する理学療法士のべ160名以上(令和元年度138名)  (2) ア・宿泊野外行事終了後の生徒アンケートにおける満足度90%以上(令和元年度99%) ・交流する大阪大学等留学生数50名以上(令和元年度60名) イ・英語イマージョンプログラム実施後の生徒アンケートにおける満足度90%以上(令和元年度98%) ・授業後における生徒の満足度80%以上(令和元年度85%)	(1) ア・6月から2月までに11回実施し、のべ614名の生徒が参加した(○)。 ・外部講師による講演の満足度は98%(○)。 イ・コロナ禍により実施できる期間が7月から1月までに限られたが、8回実施した(○)。のべ92名の生徒が参加した。(今年度は社会状況に鑑み「密」を避けるため、部活動単位での参加を減らし、個別指導中心で実施(一)) ・理学療法士の協力人数はのべ39名。  (2) ア・令和3年1月8日付の大阪府教育庁よりの通知により、今年度の宿泊野外行事は中止とした。ここまでの取組みについて、学校教育自己診断によると、第2学年の生徒たちの94%が「充実したものであった」と回答している。(○) ・令和2年11月14日に大阪大学の留学生(22名)と本校の1年生全員がZoomを利用してディスカッションを行った(○)。 ・長期留学生としてメキシコから女子生徒1名を令和2年12月16日～令和3年7月末まで受け入れている(○)。 イ・英語イマージョンプログラム実施後の生徒アンケートにおける満足度100%(◎) ・ディベートの授業後における生徒の満足度89%(○)
3 「自主自律の精神」の育成	(1) 生徒会活動、学校行事における取組みの充実  (2) 地域とつながるこころの育成  (3) 自学自習の精神の育成	(1) 生徒会執行部を中心とする生徒議会、各種委員会の活動を指導・支援し、生徒自治による体育祭、文化祭等の学校行事の取組みを充実させる。  (2) 生徒に地域と連携した活動等への積極的な参加を推奨し、地域とつながるこころ、自主自律の精神の育成をめざす。  (3) さまざまな分野の書物を定期的に紹介する等、読書指導を推進し、自主的な読書活動につなげるにより自学自習の精神を育成する。	(1) 生徒対象の学校教育自己診断における体育祭及び文化祭についての設問に対する肯定的回答90%以上(令和元年度92%)  (2) 地域と連携した活動等への参加回数生徒一人当たり平均1.0回以上(令和元年度1.0回)  (3) 生徒一人当たりの平均読書量年間10冊以上(令和元年度15冊)	(1) 今年度の体育祭は、HRでの討議を経て生徒議会で慎重に討議を重ねた結果、やむなく中止となった。文化祭についての設問に対する肯定的回答91%(○)  (2) 今年度は、コロナ禍により活動が制限される中、さまざまに工夫を凝らし活動した。生徒の参加は、原則見合わせた。活動に参加した生徒はのべ174名である(○)  (3) 生徒一人当たりの平均読書量年間14冊(○)

## 府立茨木高等学校

4 教員の 授業力 向上	<p>(1) 授業力の向上</p> <p>ア 研究授業の実施</p> <p>イ 教員相互の授業 評価の充実</p> <p>ウ 管理職による授 業評価の充実</p> <p>エ 「働き方改革」の 推進</p>	<p>(1)</p> <p>ア 主体的・対話的で深い学びを推進するための 研究、実践をさらに進める。</p> <p>イ バディシステムを継続実施し、互見授業に より教員の授業力を向上させる。</p> <p>ウ 全教員の授業観察の際に、管理職によるア ンケートを生徒に実施・分析し、授業アンケ ートとともに授業力を把握する材料とす る。</p> <p>エ 「働き方改革」の方策を検討するための核と なる組織の会議を定期的開催する。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・主体的・対話的で深い 学びを推進するための 研究授業年10回以上 (令和元年度21回)</p> <p>イ・互見授業教員一人当た り平均年2回以上 (令和元年度2.5回)</p> <p>ウ・生徒からの授業信頼度 88%以上 (令和元年度89%)</p> <p>エ・組織の会議年5回以上 開催(令和元年度6回) 職員会議の資料電子デ ータでの共有率20% 以上(令和元年度5%)</p>	<p>(1)</p> <p>ア・対面での研究授業は1回であったが、グループ ウェアソフトを利用しての授業紹介は7教科 10名の教員がのべ34回行い意見交換及び閲覧 した教員はのべ214名であった。(一)</p> <p>イ・互見授業教員1人当たり平均2.3回(○)</p> <p>ウ・生徒からの授業信頼度 93% (◎)</p> <p>エ・組織の会議年5回 (○) 職員会議資料の電子データでの共有率 20% (○)</p>
-----------------------	--	--	---	---